

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

創刊号

AUTUMN

1997

発行◎平成9年9月1日  
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会  
〒850 長崎市江戸町2-13  
(長崎県原爆被爆者対策課内)  
Tel.・Fax 095-823-4278

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

# ながしむし

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

「ヒバクシャ」は、長崎、広島のためだけの言葉ではありません  
世界中の「ヒバクシャ」が、今さまざまな問題に直面しています  
長崎のヒバクシャ医療のノウハウを  
世界のヒバクシャのために役立てたい  
長崎から世界へ  
NASHIMはそう考えています

What's NASHIM

## ナシムってなあに？

Doctor's Works チェルノブイリ原発事故後、  
現地で活動を開始した本村医師夫妻

Reports

## 旧ソ連邦から来た4人の研修医師

New Face

## はじめまして!!原研国際の新しい顔です。

Letter Box [ 秋田-ミンスク-長崎 ベラルーシトライアングル ]  
[ヒバクは他人事ではなく自分自身のことである]

Seminar

## NASHIM・原研の合同セミナー開催される



チェルノブイリの子どもたち

「なしむ」ってなあに?

**NASHIM(なしむ)とは、  
在外被爆者、世界各地で発生している  
放射線被曝事故による被災者の救済を  
目的につくられた組織です。**

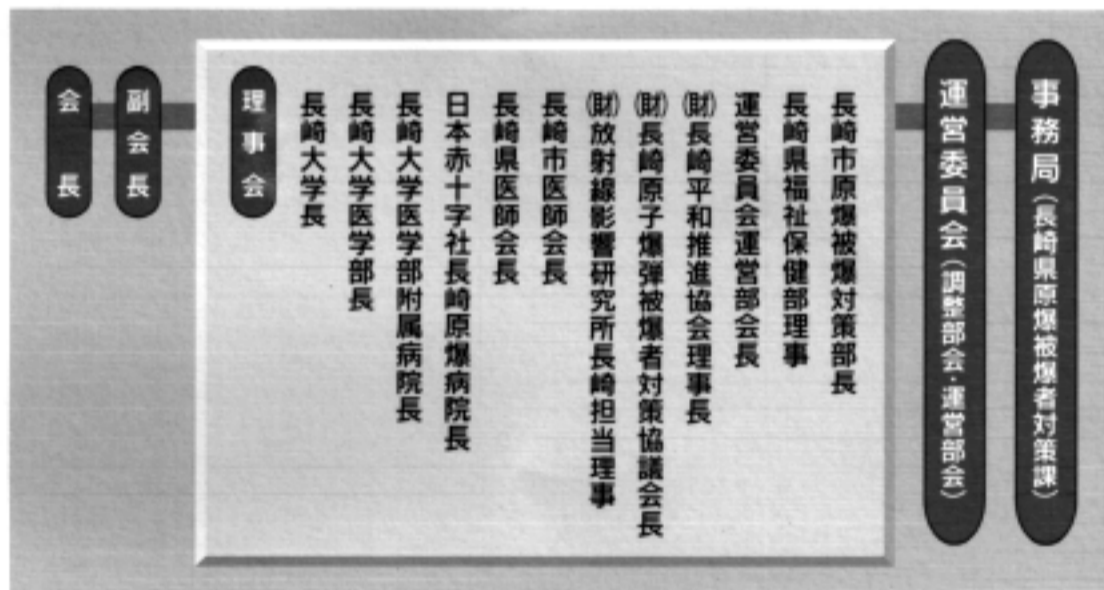


長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)は、在外被爆者および世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済を目的として、一九九二年(平成四年)に設立されました。  
長崎がもつ被爆者医療の実績および放射線障害に関する調査研究の成果をヒバクシャ医療に有効に生かしてもらうため、国外からの医師等の受入れ研修、国外からの被爆者の渡日治療などを実施し、ヒバクシャ医療を通じて長崎から世界へ貢献し、国際協力の推進に努めています。

### NASHIMの事業概要

- ① 研修生受入れ・専門医師等の派遣事業  
世界の被災地で放射線ヒバクシャの治療にあたる医療従事者への指導、技術支援、医療情報の提供などを行なうために、海外からの研修医師の受入れや海外への専門医師等の派遣を行なっています。
- ② 在外被爆者(南米・北米)渡日治療事業  
長崎・広島で被爆し、その後海外に渡った被爆者の中で、現地の医療事情や経済的な理由により十分な医療を受けられず、日本の専門医療機関での治療を望んでいる方々を長崎に招き、検査・治療を行なっています。
- ③ 放射線ヒバクシャ医療国際協力普及啓発事業  
放射線ヒバクシャ医療に関する国際協力推進の意義と必要性を啓発するため、講演会の開催や各種のPR活動および情報提供を行なっています。
- ④ 放射線ヒバクシャ医療出版事業  
医療従事者および一般市民向けに、放射線被曝に関する解説書、啓蒙書、講演会の報告書等を作成します。平成七年度はロシア語で「放射線Q&A」、英語で「長崎シンポジウム」を出版、平成八年度は「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民および家畜の健康状態」を翻訳出版、VTR「カ

### [NASHIMの機構]



- ⑤ 永井隆 平和記念・長崎賞の授与  
原子爆弾による被爆者、放射線事故等による被災者の治療および調査研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉向上を通じて世界平和に貢献し、将来に活躍が期待される国内外の個人または団体に授与します。

### お問い合わせ

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)  
(長崎県福祉保健部原爆被爆者対策課内)  
〒850 長崎市江戸町2-13  
TEL: FAX 095-823-4278  
「ホームページアドレス」  
<http://www.us1.nagasaki.ncc.or.jp/~nacity>

【創刊に向けて】  
長崎、広島から世界のヒバクシャに  
何ができるか、何をすべきかを  
一緒に考えていきたい。

今回ヒバクシャ医療国際協力通信「なしむ」を発刊するにあたり、一言皆様にご挨拶申し上げます。



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)はすでに長崎大学医学部を中心に県、市等の関係機関の献身的な御協力を得て、過去六年間、事業も順調に推移しております。チェルノブイリ関連事業の一環としては露語による「放射線Q&A」を作成し、広く旧ソ連邦に配布しております。更に本年三月には、カザフ共和国科学アカデミー調査隊による「九五八年発刊「中部カザフスタンにおける環境放射能と住民及び家畜の健康状態」を邦訳し全国の図書館や関係機関に配布いたし好評を得ておりますが、セミパラチンスク核実験場に関する放射線障害の実態を記録した当時の旧ソ連邦の貴重な資料でもあります。

在外被爆者渡日治療事業については、長崎市が単独事業として昭和五十七年度から実施していましたが、平成五年度から協力会の事業として対象者を倍増し取り組んでおります。現在まで北米十八人、南米十人の被爆者の方々をお招きして長崎原爆病院で治療しておりますが、渡日治療はもとより現地の被爆者団体からも高い評価を得ております。被爆の世紀ともいわれる二十世紀も、まもなく終わろうとしています。今後二十世紀にむけた地球レベルでの新しい平和への模索と、長崎から世界のヒバクシャに何ができるか、何をすべきかを皆様と一緒に考えていきたいと存じます。ここに「なしむ」を刊行するにあたり、広く皆様のご支持、ご理解を頂きますように、また本事業内容の益々の充実発展を切望しまして創刊号の挨拶とさせていただきます。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長

井石 哲哉

# Doctor's Works チェルノブイリ原発事故後、 現地で活動を開始した本村医師夫妻



すでにテレビや新聞等の報道でご承知の方も多いとは思いますが、今年五月から、NASHIM構成機関のひとつである長崎大学医学部第一内科の本村智子医師が、コンピュータ情報管理の専門家であるご主人の政彦さんと共に、ベラルーシ共和国のゴメリ州ゴメリ市(最も被害が甚大な州)で人道支援と学術共同研究をはじめました。これまで、チェルノブイリプロジェクトの一環として、長崎では、長崎大学医学部や、放射線影響研究所を中心として、六年間にわたって現地の医療スタッフとの共同プロジェクトが行なわれてきました。その結果、事故後、現地において特に小児の甲状腺(頸部にあり、甲状腺ホルモンを産生する臓器)のガンが増加していることが分かりました。しかし、長崎と現地では距離も遠く離れているうえに、医療技術や医師同士の考え方に差があるのも事実で、より現地に密着した医療と、正しい方法に基づきしっかりとしたデータ管理システムの確立が望まれてきました。これまでNASHIMでは、毎年夏に現地の第一線で治療に当たるチェルノブイリ周辺の医師を長崎に招へいして、実際に日本の医療技術を学んで頂くことで、このニーズに出来るべく努力してきました。すでに二十名以上の医師が、帰国後、各地で中核的働きをしています。今回の本村夫妻の現地常駐の実現は、笹川記念保健協力財団のご支援によりですが、被爆地長崎ならではの生きた国際医療協力と言えます。本村夫妻は今後二年間、現地に滞在し、地域住民と同じ物を食べ、生活しながら支援を続けて行きます。特に小児甲状腺ガンの増加について、医学、疫学の立場からも調査を行なう予定です。今後「なむ」では、本村夫妻の現地からの報告を随時掲載していく予定です。お楽しみに。

## NewFace

はじめまして!!  
原研国際の新しい顔です。



1997年4月、長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設(原研)の機構が変わり、その中で旧ソ連邦からの客員教授を招く国際放射線保健部門(略して原研国際)という部門が新設されました。原研国際では、チェルノブイリ事故後の医療協力支援活動と学術共同研究を基盤とし、セミパラチンスク核実験場(旧ソ連邦の核実験場)や旧ソ連全体の核汚染による健康障害を明らかにすることをその研究目的としています。6月からは、旧ソ連のベラルーシ共和国(白ロシア)のミンスク医科大学から、大脳生理の専門家であるセルゲイ・ベルギン先生を客員教授として招いて実際の活動をスタートさせています。原研国際は、原研2号館(旧資料センター)の1階にあり、メンバーは、原研細胞との兼任である山下俊一教授と客員教授のベルギン先生、助手の高村昇先生、そして事務の松本さつ美さんの2+2名という非常に小さな教室です。まだまだスタートしたばかり、しかも人も資金も心もとない中での船出となりましたが、「山椒は小粒でびりっと辛い」という言葉を肝に命じ、NASHIMの一翼を担うべく頑張っていきますので宜しくお願いいたします。なお、原研国際のホームページを公開していますので、ご覧になりたい方は下記のアドレスまでどうぞ。特に「放射能 Q&A」のコーナーでは、皆様からの放射能に関する質問や感想を受け付けています。どんな質問でも構いませんので宜しくお願いいたします。

ホームページアドレス: <http://abomb.med.nagasaki-u.ac.jp/inter/>

## Reports 研修レポート 旧ソ連邦から来た4人の研修医師

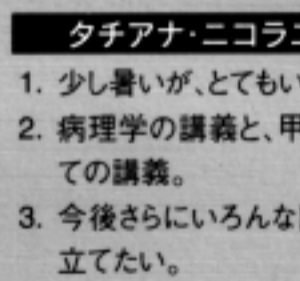
去る7月29日から約40日間にわたって、旧ソ連邦のチェルノブイリ原発やセミパラチンスク核実験場の周辺で、放射線障害の治療にあたって医師団が、平成9年度研修生受け入れ事業で来崎され、研修を行いました。今年で5回目となるこの研修に参加された医師団の横顔を紹介します。

- 質問内容
1. 長崎の印象
  2. 印象に残った研修について
  3. 帰国後、この研修をどう活かしたいか



ザクスペイ・ジュマティロフ医師(カザフ共和国)

1. 非常にきれいな町。
2. 神戸での甲状腺外科の病院の研修はとてよく、ビデオにおさめてきた。
3. 日本の医療機材はとて優れている。長崎で得た知識を、帰国後、自分の講義やセミナーの場で役立てたい。



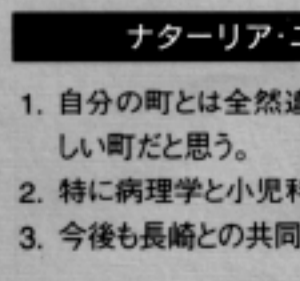
タチアナ・ニコラエワ医師(ベラルーシ共和国)

1. 少し暑いけど、とてもいい町だと思う。
2. 病理学の講義と、甲状腺ガンの早期発見についての講義。
3. 今後さらにいろんな説明を受けて、自分の国で役立てたい。



ルスラン・シシコフ医師(ロシア連邦)

1. あまり大きくないが、住み心地の良い町だと思う。ヨーロッパ人が始めて来た町だと聞いており、とても興味深い。
2. 神戸で甲状腺外科の病院を見学できたこと。
3. 日本の手術技術や診断技術を学んで今後役に立てたい。



ナターリア・ニキホロワ医師(ウクライナ)

1. 自分の町とは全然違うが、寺院や自然がとて美しい町だと思う。
2. 特に病理学と小児科の研修。
3. 今後も長崎との共同プロジェクトを進めていきたい。



# Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

（長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介します。）

## 秋田-ミンスク-長崎 ベラルーシライアングル

秋田ベラルーシ友好協会副会長  
佐々木正光さん

一昨年8月、秋田大学医学部とミンスク医科大学が姉妹校の締結をし、続いて昨年5月長崎大学医学部とミンスク医科大学との間で同様の締結が行われました。締結式には、クバルコ学長が来日され、これを機に秋田ベラルーシ友好協会とNASHIMの深い絆ができ、今年6月には共同事業として秋田市で講演会を、その後当協会へ招へいしていた研修医3名をNASHIMへ送り、ヒバクシャ医療の本場で研修、原爆資料館の視察等、貴重な経験を積みました。

チェルノブイリ原発事故も問題点を絞って、また日本のNGO団体もお互い情報交換をし、連携して効果を出せる共同事業を積極的に推進すべき時代に来ているのではないかと思います。

その意味で「なしむ」の発刊は今後大きな力になると思います。



## ヒバクは他人事ではなく 自分自身のことである

総ヒバクシャの時代意識  
会社員(福岡市在住)  
松本旺山さん

私は平成7年4月から約2年間、仕事の関係で長崎に住んでいましたが、それまで半世紀も前の原爆についてはあまり関心がありませんでした。

ヒバクシャと自分とは全く別の存在であり、これからも全く無関係であると思っていました。しかし、昨年NASHIMで出版されたセミパラチンスクの核実験報告書を読んだり、山下先生や高村先生の講演会に参加して、ヒバクに対する認識が全く変わりました。それは、自分がいつヒバクシャになってもおかしくないのが現実の世界であるという事が分かったからです。私はこの事を多くの人に知って欲しいと思っています。このような折、「なしむ」が発刊される事は、大変有意義なことであると思います。今後の発展を期待しています。



## SCHEDULE

今後の活動スケジュール

9月7日 平成9年度チェルノブイリ・カザフスタン  
関連第1回独自受入研修生帰国

9月下旬 専門医師等派遣事業  
韓国独自受入研修

10月上旬 第2回 永井隆 平和記念・長崎賞  
受賞者決定

10月中旬 南米渡日治療

11月 講演会・写真・パネル展

## 編集後記

NASHIM構成機関である長崎大学医学部、原爆病院、県庁、市役所などの若手素人集団が、なんとか「なしむ」の発刊までこぎつけることができました。過去5年間のNASHIMの実績をもとに、知られざる世界中のヒバクシャの実態と、私たちの活動内容を紹介する予定です。長崎の原爆被災者だけでなく、広く市民、県民の皆様にご理解頂けるよう、今後は季刊紙としての充実を図りたいと思います。読者の方で、「なしむ」に対するご意見やご質問がありましたら、NASHIMまでお気軽にお問い合わせください。

## SEMINAR

## NASHIM・原研の 合同セミナー開催される

去る8月2日、NASHIMと長崎大学医学部原爆後障害医療研究施設(原研)共同開催の第2回公開セミナーが、約50名の参加者を集めて医学部のポンペ会館で行なわれました。

当日は原研で日頃放射線関連の研究に携わっている先生方から、「放射線とは何か」や「放射線障害」についての講演がありました。原研の難波先生からは、先頃出版された「放射能Q&A」をテキストにした講演があり、同じく原研の関根一郎施設長からは、原爆による放射線障害について、その実相と最近の研究による知見を交えての話がありました。「測ってみよう放射線」のコーナーでは、参加者の皆さんに、実際に身近にある物の放射線の測定をしていただきました。参加者にも好評で、測定の様子は新聞でも紹介されました。さらに旧ソ連邦からのNASHIM研修医師を招いてのコーナーでは、現在のチェルノブイリ原発やセミパラチンスク核実験場周辺の住民の健康状態、その他多くの質問があり、参加された市民の皆さんを交えて活

発な討論が行なわれました。参加者は異口同音に放射線について具体的に考え、知る機会を得たと非常に喜んでいただきました。

来年以降もこのような企画で、少しずつ正しい放射線の知識を広めて行きたいと思います。同時にNASHIMコーナーと原爆パネル展を併設しました。セミナー後のアンケートでは「今後、もっと広報を盛んに行なえば参加者が増えるのでは」、「セミナーに限らず、NASHIMが行なっている様々な活動をもっと広報してもらいたい」といった御意見を数多く頂きました。

今後はこの「なしむ」を通じて、積極的に広報活動を行なっていきたいと考えています。この場を借りまして、いつもボランティアで準備、貢献して頂いている裏方の皆様や先生方に感謝申し上げます。

